



鴻文会会報

第 12 号
発行・鴻文会

733 山口市吉田1677-1
山口大学人文学部内
電話 (0839) 22-6111
(内線) 808
郵便振替口座
下関 0 - 1 5 9 0 2

随想 — 心の豊かさを求めて

鴻文会特別会員 山 本 泰 男

会報編集委員会から巻頭の文章執筆の御依頼があり、全く思いがけないことでその任ではないと思いましたが、昭和三十八年文学部に着任してその後教養部に移り、英語クラスを通じて三十年近く鴻文会の皆様とも親しく接し色々お世話になりましたことを思い、拙い筆をとらせていただきました。

二十世紀という激動の世紀に生れ身をもって体験して世紀末を迎えたいま、私には感慨深いものがあります。後世の史家は一体この二十世紀をどのように記述するであろうか。二十世紀はまことに不幸な世紀であった。そこではかつて例を見ない苛烈な世界大戦が二度も行われ、社会主義と資本主義がはげしく対立して長期の不毛な争いをくり返し人類に多大の犠牲をもたらした。こんな風を書く歴史家もあるのではないかと夢想するのです。

もとよりこれは政治経済歴史などに全く無知な老人のたわ言にすぎませんが、ただ私には社会主義も資本主義も非常によく似た点があると思われてならないのです。それはいづれの主義も、物の生産と分配の方式に主眼をおき、物が豊かになりさえすれば人々は幸福になるという楽天主義に基づいているように見える点です。しかし、数年前でしたかNHKで放映の「ダイナステイ」とかいふアメリカ大富豪のドラマにもありましたように、地位、名譽や物質的繁栄のみでは人は幸福にはなれません。

我国ではいま、政治家は生活大国と叫び、一般国民は八割から九割までが中流意識をもつと言いながら豊かさの実感がないと訴えています。これはどうしたことでしょうか。豊かさの実感がないとはどういうことでしょうか。実感するのは誰か。他ならぬ自分自身ではないでしょうか。そうだとすればたとえ数億円の豪邸に住んでいても自分が仕合せだと思わなければ豊かではありません。真の豊かさを実感するためには、物が豊かになることも大切ですが、個人個人の心の豊かさも必要なのではないでしょうか。

二十一世紀は会員の皆様の時代です。山口で過された若き日の純粹さと心の豊かさを大切にされて益々今後活躍し発展してゆかれることを期待してやみません。

(山口大学名誉教授)

「第十四回委員会」報告

一九九二年六月二十七日に、第十四回総会に合わせ、研究室の同窓会や年度の役員会が開かれました。まず、山本和之学部長から挨拶があり、昨年度の活動報告と今年度の事業計画が検討されました。以下、簡単に概要をご報告いたします。

一、平成四年度の予算について。今年度から、「支出の部」の科目を一部変更することになりました。従来の謝金と事務費と統合して、事務費にします。金額も三十万円に引き上げられました。幹事をはじめとする事務部の活動をもっと活発にするようにとの意見でした。また、今年度から積立金の科目を立てました。かねてから予備費の占める比率が高いことが問題とされてきました。予備費と積立金を分けて、収支実績を明確にすることが目的です。

二、来年度は、名簿を作成する年にあたります。名簿作成費は負担が大きくなり、通常の予算ではまかないきれなくなっていました。次回から、名簿を有料にする案が検討されました。卒業後の最初に受け取る名簿は無料とするが、その後は有料とすることになりました。次回は、郵送費込みで一冊二千円とする案が検討されました。また、毎年、名簿のための問い合わせを行い、追跡を密にしてはどうかと意見が出ました。

三、来年度は、総会を開催する年でもあります。多くの出席者を迎えて、少しでも盛大な会にしたいと希望しています。

総会に合わせ、研究室の同窓会や年度の役員会を開くよう企画してどうかという案が出され、今後検討することになりました。

四、鴻南会(旧制山口高校同窓会)との共同事業が検討されています。理学部の同窓会との共催となりますが、事業の具体的な検討はこれからすることになります。

五、事務の近代化は、数年来の課題となつていきます。今年度は事務費を十分予算にあげて、その活発な活動を期待する、ということになりました。

私の中の山大・山口

思い出と今の心境

川島 明

(英米文学・文理第十三回卒)

卒業して二十八年、北九州の戸畑から山口に来て三十二年になる。まさか山口に三十年以上も住み、山口の住民になるとは全く思ってもみなかった。高校時代の級友が山口では寮生活が月二千七百円で出来るかと教えてくれ、私は鳳陽寮の西寮で暮らすことになった。寮祭や大学祭などに纏わる数々の思い出があり、鳳陽寮と山大理の跡地付近を通るといつも懐かしさがこみあげてくる。

大学生活で最も思い出深いのはESSのサークル活動でソーントン・ワイルダーの『Our Town』を上演したことである。四ヶ月間の猛練習は忘れようにも忘れられない。英語劇の上演はESS初めての試みで、生みの苦しみはすべての部員が味わった。気質の違う人間同士の間で色々な誤解や偏見があったが、この英語劇の準備の過程でお互いのありのままを理解するようになり、部員間の人間関係がヒューマニティに富むものに発展した。脚本の英文は三時間分あり、それが体に染み付いた。自分の台詞だけでなく、すべての英文をいつの間にか覚えていた。上演後、「大成功だ」と言って、舞台裏に池本先生が飛び込んで来た。打ち上げコンパに池本先生と音声指導をされたデイビッド先生も来られた。それまで、酒は好きではなかったが、このコンパの時の酒はものすごく美味かった。(練習で帰宅の遅い日々のある日、密かに想いを寄せていた女性が小倉から突然訪れたが、会えなかった。会えていたら、運命は今とは違った悪戯をしているだろう。)

英米文学科で特に印象深い講座は四年の時、東洋と西洋の思想の共通点を研究しておられた池本先生の『ZEN IN ENGLISH LITERATURE AND ORIENTAL CLASSICS』と十八世紀の英文学を研究しておられた和田先生の『十八世紀の英文学の作品の講読』である。和田先生の講座では『ロビンソン・クルーソー』、『ガリバー旅行記』、『トム・ジョーンズ』など三百頁以上ある本を含めて数冊読んだ。『トム・ジョーンズ』の映画を講読の時間に皆で見に行ったことは鮮やかな

印象として私の心に残っている。二年の時のストライク先生の米文学講読は『赤い武勲章』と『グレイト・ギャツビー』で私には難しかった。一時間で進む範囲が広いので予習では未知の語句を調べ、意味を考えるだけで精一杯で、内容を深く検討したり、行間を読み取るゆとりがなかった。ストライク先生の深い内容理解を求める質問には全然答えられなかった。自分の英語力の不足を痛感した。

こんな私が教員になってしまった。「教えることは学ぶことだ」とよく言われるが、教員生活を通してその事を十分味わっている。生徒のお陰で大いに勉強させられた。少しは進歩したかなと思うけれど、自分は知っている事より知らない事の方がはるかに多いとつくづく思う。家庭の事情が許せば、どこかの大学の研究科で、或いは大学で助手をしながら勉強をやりたいと最近思っている。

(山口高等学校教諭)

パークロード



昭和62年 日本の道百選のひとつに選定された

シドニー湾の夕焼け

有馬 正人

(西洋史学・文理第四回卒)

先日私は東豪州に出張した。石炭鉱山、石炭積出し港を視察する目的である。徳山を中心とした周南コンビナート地域は、一九八〇年より『脱石油エネルギー転換』が積極的に推進され、にわかには石炭が脚光を浴びることとなり、とりわけ豪州の石炭とのかかわりが深くなって来ている。

周南地区の企業だけでも、約三〇〇万トン／年の消費量であり、豪州から我が国が年間輸入石炭は、原料炭(鉄鋼用)一般炭(燃料用)を合わせると約六〇〇〇万トンである。我が国の年間石炭消費量が一億二千万トンであるから実に五〇％を豪州に依存していると言える。

そんな訳で、この度は現実に我々が取り扱っている出光興産が一〇〇％のシェアをもつ、Queensland州のEvensdale山、Brisbane, New Castleの積出し港を見学することになったのである。メンバーは出光興産徳山製油所副所長、東ソー事務部次長、東洋港運業務部長、旭興産(出光子会社)事業課長、岐陽海運(徳曹子会社)社長といったそうそうたる顔触れである。

私は一九七八年にも豪州に来ていてこれで二度目の訪問である。尤も前回はソーダ工業塩の関係で塩田に視察が目的で、前回は『白』、今回は『黒』である。僅か十数年の間に驚いたのは、やたら日本人の観光客が町に溢れていることだ。団体さんからジーンズをはいた若者

達がうようよよしてあり、お土産店はショッピングに狂奔する我が同胞でござった返しだ、豪州にとっては日本は今や大変な顧客となっているのだ。前述の石炭、鉄鋼石、原塩(Solar salt)、現在我が国の需要の六〇％を供給)、アルミインゴット(昔はボーキサイトを輸入しアルミ精製をしていたが、我が国では電力コストが合わない)、インゴットにして輸入)これ等の対日輸出は豪州の貿易総額の六五％を占めている。

かつて豪州からの輸入の主体は羊毛であったが、化繊の浸透により、今や斜陽の産業となってしまったが、これ等の工業資源の需要増によって外貨収入源が変遷して来ている。それに新しく加わった外貨収入は、『観光事業』である。

自然が美しく、治安が良く(凶悪犯罪は殆ど無い)である。物価が安いので人気が出て来たようで、最近ではハワイよりも豪州に行くハネムーンカップルが多くなったようである。

閑話休題、私は日程をやり繰りして最後の日にはどうしてもCamberaに行くことを心に決めていた。その目的は、海軍記念館に展示されている日本海軍の特殊潜航艇をなんとかして見たいという願望があったからである。

る。

当時は私は未だ小学生であったが、シドニー攻撃の快挙に小躍りしたことを覚えていた。特殊潜航艇の乗員として松尾大佐、中馬中佐というヒーローの名前もかすかに頭の中に残っている。問題は此の後の話である。私が昵懇にしている徳山バルクターミナル(株)の内山社会(出光、徳曹、当社の合弁石炭ターミナル会社、氏は出光興産から出向)の実兄吉高諄氏(元日本航空常務取締役)が日本工業倶楽部の会報に寄稿された『豪州シドニー慰霊の旅』という紀行文を読ませて戴き感動しCambera海軍記念館訪問を決心したのである。

シドニー湾に潜入した三隻の潜航艇の内、一隻は防潜網(Boom net)に引っ掛かり、自爆した。一隻はシドニーのHarbour Bridge付近まで潜入して、停泊中の連合軍艦船に向けて魚雷を発射した。(魚雷は一隻二発づつ搭載)豪州海軍補給艦Kuttabiに命中し、これを撃沈、さらに陸上軍事施設に当たりこれを爆破、二十一名が犠牲となったと記録されている。

『まさかこんなところまで日本軍が!』ということで湾内大混乱となったという。結局集中砲火と爆雷の攻撃で残る二隻とも撃沈され、彼らは母船に帰ることはなかったのだが、此の勇気ある行動は豪州海軍でも非常に称賛を受け、船体を引き揚げ、遺体を名譽ある『海軍葬』により鄭重に葬ったという美談があるのである。(遺骨はスイス総領事館を通じて遺族に送り届けられた。)

Muarhead Gludey、『勇気というものはいずれの国の独占物でもない、敵と同様に豪州の人々にも分かち与えられるものである。』と言って『勇者としての海軍葬』を提言したという。

昭和十七年といえは、開戦以来半年である。シンガポールを攻略し、バタワン半島からマッカーサー大将を追い落とし、パプアニューギニアに進攻した日本軍の威勢の良いころである。我々は当時『鬼畜米英』と教えられていたときである。此のとき若し反対の立場にあったとしたら、我々はこのように手厚く敵の死者を遇しただろうか? 豪州には『騎士道精神』が生きていたのである。ところがどうだろう、残念ながら、我々は二言目には言っていた『武士道精神』をすっかり失ってしまった、敵方の兵士に『報復』の刃を向け、残虐行為を重ねることになってしまったのである。

夕食のとき、出光の駐在員に、『明日でもキャンベラに行きたいのだが、』と持ちかけたが、『キャンベラ? ああ、分かりました。有馬さんが見たいのは特殊潜航艇でしょう。今ちょうど五〇周年の記念行事としてシドニー海洋博物館で展示をやっていますよ。ハーバーブリッジのすぐ近くです。明日案内してあげましょう。』と言うことで奇しくも攻撃から五〇周年記念の展示物をシドニーで見ることができた。(もちろん実物をキャンベラから運んで来ているのである。)

『Maritime Museum』は鉄骨を多用したパビリオンで、あたかも船の船内にいるような感じの立体的な構造で、かつて移民船であった『Victoria』の巨大な

“Stock-Anchor” (腕の付いた錨) や、Captain Cook の “Log-book” や、帆船の “Bow-sprit” (船首部)、索具、羅針盤、海図等貴重な海洋の歴史を物語る物品が展示されていた。若し、もっと時間があれば、ゆっくり三日がかりぐらいでゆっくり見て歩けば、さぞ楽しいことだろう。残念ながら今回は時間が限られているので、海洋の歴史は次回の楽しみに残すこととして、“The Japanese Midget Submarine” の展示室に急いだ。二〇〇〇m位のかなりスペースが取っており、日章旗と軍艦旗が数旋揚げられており、“Hitting Home, The Japanese attack on Sydney 1942” と掲示されていた。“Hitting Home” と言うのが今回の催しのテーマであらう。

豪州は建国以来外国からの攻撃を受けたのはこれが初めてであるのだ。特殊潜航艇は、船首、操舵室、船尾の三つのブロックに分けられており、ガラス越しに内部を見ることが出来る。中は非常に良く手入れされて居り、とても五十年も経っているとは思えないくらいである。船体の外板も良く維持されて居り、錆は全くなかった。

船尾は爆雷を受け、船体がチューリップ状に開いて居り、爆雷の後が生々しく、スクリーン・シャフトが「く」の字にひん曲がったままになっていた。乗組員の遺品もあり、上下一体になっていたいわゆる “ポイラスーツ” の左腕には、小さな軍艦旗が縫い付けてあった。写真のパネルがあり、撃沈された補給艦 “Kuttabi”、撃沈され海底から引き揚げられる “特殊潜航艇”、“海軍葬” で豪州

軍儀仗兵に守られた潜航艇乗組員の柩(敵国である日本の軍艦旗で覆われている)、甲砲を空に向けて撃つ儀仗兵の姿、これ等の五十年前の写真を見ていると、思わず目頭が熱くなって来た。

断っておくが、私は国粋論者でも、戦争賛美者でもない。私共こそ、戦前、戦中、戦後を幼年期、少年期を過ごし、戦争の惨めさ残酷さを身をもって体験しているのだ。戦争はあってはならないし、起こしてはならないことは当然である。

ただ、豪州において大戦中このようなことがあったという歴史的事実と、豪州軍が行った崇高な「騎士道」と「人間愛」を忘れてはならないと思うのである。観光旅行でオペラハウスだとか、コアラパークだとか、カジノでギャンブルを楽しむのもよいだろう。だが、特殊潜航艇を想起する人は極めて少ないのが寂しい限りである。今日の我が国の繁栄の陰に、こうして散華して行った若者があることを忘れてはならない。こうして人柱となつた多くの人達の犠牲のうえに立つて、現在の経済大国となり得たと言つて過言ではあるまい。

その夕べは、“John Caduan II” というクルーザーに乗船して、黄昏のシドニー湾をクルージングした。ハーバーブリッジの近くの海域に来ると、五十年前に特殊潜航艇がこゝまで潜入して来て、連合軍艦船を攻撃したかと思うと、感無量であった。

『勇者は永遠なれ！』私は夕焼けのシドニー湾に鎮魂の酒杯を揚げた次第である。(徳山海陸運送(株)取締役業務部長)

パーキンソンと

肝硬変と未熟児と

有近 八重子 (国文学・文理・第二回卒)

三十六階の部屋に足をふみ入れたとたいん思わず「まあきれいな」と叫んでしまった。ここは神戸市の埋立地に建つ超高層マンションの一室である。新築でまだ家具の入っていない広々とした部屋もさることながら、外の景色の素晴らしいこと。

北側の窓からは眼下におもちゃさながらの自動車と電車が走り、その向うの海を大きい貨物船がゆっくり横切る。その又向うの神戸の街並のうしろに広がる六甲山。西側の窓からは港のはずれに広がる海が見え、たつた四時間前に山また山の徳地から出て来た私には今、目の前に広がる景色は外国に行った様な感じさえさせる。

あくことなく眺めている私に「もうすぐ引越し屋さん来るからあちらの部屋に子供を連れて行って」と娘の声。何をしに私がここへ来たかと言う現実に戻る。娘が二番目に生んだ子は七〇〇グラム

の超未熟児で、一年八ヶ月間ずっと病院生活をしていた一週間前に退院したばかり。その間気管には管を入れられ、体には様々のモニターをつけていて、はずしたあとも今だに声は出ないし、寝返りは出来るものの、おすわりも歩くことも出来ず、最悪なことには何時呼吸困難を起すかわからないから片時も目が離せない状態なのである。夜はモニターをつけて眠るけれども、日中は運動を妨げるの

で絶えず動きに気を付けていなければならない。引越して忙しい娘にかわって孫の面倒を見る為に急ぎょ私がやって来たと言うわけである。

娘夫婦の引越しがすむと一週間後にはパーキンソン病で一人ではベッドから起きられない義父と肝硬変で無理がきかない義母との同居が始まる。目が離せない赤ちゃん一人だけでも大変なのに病気の両親との同居は、「とてもじゃないけど不可能」と云いきる親戚の言葉にも敢えて実行したのも、にっちもさっちも行かない所まで来てしまった上でのことで、私達もはらはらしながらもどうすることも出来ないことである。

今まで赤ちゃんとは娘は、山口の日赤病院へ、長女は私の所で預かり、義父はリハビリ病院へ、義母は親戚の内科病院へと家族がばらばらになってしまし、神戸から休みごとに帰ってくる娘の主人はあちこちかけずり廻る有様。これでは三すくみで前進は全くなく、思案の結果が家を購入して神戸で同居しようと言うことになったのである。

しかし、両親との同居にふみ切るまでには色々障害があった。第一が義父の猛反対にあったことである。余生を生まされた家で過したいと云う思いで、山口の家を改装し、帰って来てから三年もたっていないから無理からぬことで納得に神戸から日曜日に帰ってくる始末。次には家の中を車椅子で移動出来、病院にも近くて生活が便利な所、更に自分の通勤にも便利な所と云う条件を満たす家が仲々見付からなかったことである。やっとこれらの条件を満たしてくる

ここ「六甲アイランド」は最近出来た夢の島だとか、病院あり保育園、学校、デパート、スーパー、公園、遊園地とあらゆるものが揃っている。

二日目にはどうか荷物も片付き次女を父親に預けて食料品の買出しに娘と初めて下に降りる。マンションから一歩外に出たそこは全く別の世界が展開されていた。新しく出来たこの島は若者たちのデートの場所になっていくらしく、手をつないで歩く者、肩をだいて歩く者、腰に手を廻わして歩く者、様々なカップルが目にもなく泳ぐようにそこかしこにたむろしていて、寸暇を惜しんで生活用品を買い物かごに投げ込んでいる娘の姿は場違いな人間のように見えて可哀そうな気がした。

これから先どの様な生活が待っているか「神のみぞ知る」のだが、あとに戻れないのだから元気に乗り切って欲しいと願いながら神戸をあとにした。

中国の高学歴女性の結婚事情

佐々木 衛

(社会学・文理・第十九回卒)

中国の社会調査で世話になった大学院のある女性が、今年の秋、広東省政府に就職することになり、北京を離れました。広東はいまでもなく中国経済発展の象徴的な存在であり、広州政府のお役人になれるのはエリート中のエリートと見なされています。才能が十分試され、手腕をいかんなく発揮できる機会に恵まれて

いとみなされています。喜びに満ちた選択に違いないのですが、しかし当の本人は悲嘆にくれて任地に赴いたのです。彼女の指導教授の話では、彼女には一級下の恋人がおり、彼は卒業後も北京を離れたくないということだそうです。広東と北京は、どんな速い特別急行列車で一度就職すると、職場が変わることはほとんど困難だという中国の事情もありま

す。恋人との関係は疎遠になるばかりでなく、将来の結婚は絶望的になったと一般に誰もが判断せざるをえません。中国の女性が理想とする結婚相手は、いわゆる「三高」(身長、収入、高学歴)といわれています。高学歴の女性も、理想の相手の条件はこの例外ではありません。しかし、一般に男性からすると、結婚の相手としては自分より学歴の高い女性を敬遠される傾向にあります。したがって、大学院を修了した女性は伴侶を求め

るのに、一種の困難をとまなうと見なされてしまいます。事実、新聞やテレビで伴侶を求める紹介番組が最近流行していますが、結婚適齢期を逃したと見なされた高学歴女性がしばしば登場します。先の先生のお話では、大学の宿舎には未婚の女性をかかえる家庭が多く、社会的にも問題になりつつある、とのことでした。

現在の中国の大学では、自由恋愛が盛んで、恋人のいない学生の方が少数のようです。夜のキャンパスでは、抱擁しあうカップルによく出くわします。また、大学の前の屋台では、一本のビールで夜がふけるまで話し込んでいる恋人たちの姿をみる事ができます。プライベート

な空間が保証されていない中国の大学生活では、彼らの気持ちはこちらにも突き刺さるように響いて、悲しい気分になります。

大学卒業者の比率が圧倒的に低い状況では、職場でふさわしい伴侶を見つけないのは困難なかも知れません。全国からエリートのあつまる大学で伴侶をさがす方が、望む相手を見つけないにふさわしい機会となるでしょう。しかし、恋愛に失敗すると、「貞操観念」をのこす社会では、女性に不利になることはまちがいありません。素晴らしい恋人を見つけ、恋愛を発展させることは、ロマンチック

なことに違いありませんが、以上のような状況では、単にロマンチックな範囲を越えているようです。高学歴の彼女たちの恋愛には、われわれ日本人が想像することができない真剣さ、そして痛々しさを感じさせました。

夜を過ごしていきその日の到着だったせいか、まだ意識のどこかに山口を出発する際の慌ただしさが、そして福岡の街のざわめきが残っていた。しかし、体は一目散に、ウィーンの街へと運ばれて行く。妻や娘たちは、これから住むことになるウィーンの街がタクシンの窓越しに遠く輝き始めると、眠気や疲れも忘れて、初めて見るウィーンに興奮まじりの歓声をあげている。私は懐かしい街並みを確認しながら、錆び付いたようなドイツ語で、運転手に語りかける。「ウィーンって変わらないねえ、静かだねえ」と。ドイツ統一のちょうど二年後である。山口にいたときから、旧東ドイツは暴動が多くて家族連れは危ないだろう、ホテルがないだろう、ユーゴが戦争をしているし、東西の難民の拠点であるウィーンも混乱しているのでは、というようなことをしばしば耳にしていた。しかし、そ

ウィーン幻想

岡光一 浩

(文理・第十四回卒)

三度目のオーストリア国ウィーンの滞在である。前の二度と違うのは、今回は十ヶ月近い長い滞在であること、妻と三人の子供を連れての滞在であることである。恐らく、これまでとは違った生活になるだろうという憶測のもとでの出発だった。十月初め、もうウィーンは晩秋である。飛行機が遅れて、夜の十一時頃の到着だった。福岡、ソウル、フランクフルトを経由しての十八時間の旅だったが、



筆者 ウィーンにて

んな気配は全くなかった。夜だったからではない、この思いは滞在中ずっと感じたことだった。テレビや新聞は毎日、すぐ隣の国ユーゴの戦争を生々しく伝えてくる。数時間電車に乗ると、そのままその国に入り込める近さである。知り合いのウィーン滞在の日本人記者がそこで銃で打たれたというニュースも伝わってくる。しかし、ウィーンはなにごともないかのように「静かで変わらない」ようにみえた。また、「音楽の都」ウィーンには「音楽」さえないのである。日本では電車で乗っても、街を歩いていても、つねに騒音まがいの音楽に悩まされる私たちには、ここは「音楽」もない、異様に静かな世界と行ってよかった。ウィーンに二年いて、帰国した子供が体調を崩した、という話もある。ウィーンは静かで、どんなことがあると、大事なことが別にあるかのように、いつもシーンと静まり返っている。恐らく彼らにとって、この静けさこそが音楽の素晴らしさを聞き分ける必須条件なのであろう。

しかし、ウィーンは別の姿ももっていた。人々は立派で華やかな装いをして街を歩くことに精を出し、旧市街の一角には雑踏のごとく観光客が押し寄せる。百を下らない数の劇場、オペラ劇場、コンサートホールでは、毎日のように、劇や音楽好きのウィーン市民の歓声が響き渡る。彼らは軽やかで華やかな古き良き、ヨハン・シュトラウスの『美しき若きドーナウ』の世界に酔いしれる。彼らの目はその時、現実にはなく、それを忘れようとするかのように内側に向かっている。ウィーンは今も、百年前のあの華麗なハプスブルク文化に想いを馳せ、どんな場合にも「静かで変わらない」かのように、つねにたたずんでいる。民族、難民、失

業、経済、老人問題など深刻な社会問題をかかえ、国際的に難しい立場にあることなど少しも見せないで。

ウィーンは晩秋の夕べの光が似合う街である。私は光のなかで多様に变化するその姿をなんども眺め、実によくこの街を歩いた。何ももたないで歩くこともあった、足任せでぶらぶらと。それも結構楽しかったが、見落とすものがたくさん出てきた。普通は地図とガイドブックをもって歩く。しかしこれも、目的地に行くことばかりが先行して、その途中のものを「見落とす」してしまう欠点があった。それはワルツの曲に乗って、優雅に踊り続けるウィーンを見たことにしかならなかった。短期間の滞在ならそれも仕方ないが、私の場合、「夢の都」の矛盾や影の部分までもみるための滞在だった。そこで私は、ウィーンの作家たちや画家たちの作品をガイドブック代わりに歩いた。並木におおわれた美しいリング通りに並ぶ、ハプスブルク帝国の威光を示す壮大な建築物を眺めながら、またカフェにすわって、窓の外を仲睦まじく通り過ぎる恋人たちを見ながら、そしてウィーンの森のふもとでワインを飲みながら、私は同時にシュニッツラー、ホーマンスタール、ムーゼルといった作家たちの、そしてクリムトやシーレといった画家たちの世界を重ね合わせた。彼らの敏感なアンテナは栄光の都ウィーンの「影」の部分まで、私たちに教えてくれるという思いがあったからである。彼らの作品の人物たちの、感情というフィルターを通して、私はウィーンの建物や街並み、恋人たち、女たちの隠された内面を知り、ウィーンの「光と影」の両方を見ることができたように思う。

(ドイツ語学・ドイツ文学教授)

人文学部教官紹介

学部長(併)	山本和之	社会心理学	小川全夫
教授	武宮正諦	教授	カシマテツデン
助教授	松本正男	助教授	佐々木真衛
倫理学	遠藤和哉	講師	真実真弓
中国哲学	加藤徹	国語学	関一雄
教授	澤谷昭次	助教授	添田建治郎
助教授	高木智見	国文学	石井大
日本思想史学	豊澤光一	助教授	柴田勝二
講師	頼住光一	中国語学	入谷仙介
美学・美術史	石原達二	助教授	富平美波
助教授	奥津達聖	中国文学	阿部泰記
国史学	八木誠二	英語学	浅見洋二
教授	畑地正憲	教授	山本和之
東洋史学	滝野正二郎	助教授	岩部浩三
教授	小川創二	外国人教師	アレクサンダー・ブルース
西洋史学	尼原豊志	英米文学	
助教授	近藤喬一	教授	和田敏英
考古学	中村友博	助教授	山本聡美
教授	近藤喬一	ドイツ語学・ドイツ文学	岡光一浩
助教授	小原豊志	講師	下嵩正利
手	小原豊志	フランス語学・フランス文学	末松三壽
社会学	小谷典子	助教授	井上三朗
教授	小谷典子	言語学	信森廣光
		助教授	平野尊識
		埋蔵文化財資料館	豆谷和之
		助手	

榎野川の河辺にて

加藤和哉

西日本といえば、神戸までしか来たこと
のなかった私が、こちらに越してきて
半年がたちました。山口に来て以来、い
まだによくきかれることがあります。
「ずいぶん田舎でしょう？」 退屈してい
るのではないか、という同情（もしかす
ると、楽しみ方を知らない都会人間に対
する少々の意地悪？）がこめられている
のでしょうか。確かに、これまでほぼずつ
と東京暮らしだったので、町の大きさ（小
ささ？）、生活のリズムなどの違いは戸
惑うほどです。ただ、それは不満という
のとは、全然違います。

まず、こちらで初めて教壇に立つこと
になった私にとって、何よりも時間の余
裕があるということだけでもだけだけあ
りがたいことでしょうか。東京に帰るた
びに友人に指摘するのですが、通勤通学
などの移動に一日少なくとも二時間かか
るとすれば、一年でそれは七三〇時間
あり、つまりほぼ一ヶ月分になります。
現在、私は自宅の戸口を出てから、研究
室に入るまでも、おそらく十五分とは
かかりません。さらに長時間の移動に伴
う人間的エネルギーの損失まで考えに入
れるとすると、教職以上の差があると言
えるでしょう。もちろん、その分だけよ
けいに仕事をしているわけではありませ
んが。

ど学問的可能性のある場所は多くはない
とすら言えるでしょう。実際、ケンブリッ
ジなどのヨーロッパの大都市の規模は、
ほぼ似たようなものであり、多くの研究
者が自転車や徒歩でも気軽に集えるよ
うな環境こそが、幅広い交流に支えられ
た視野の広い学問成立の基盤となってい
ます。どれほどテクノロジーが進歩し、
データ・情報の距離を越えた交換が可能
になろうとも、学問研究は人間と人間の
直接的な出会いの中で遂行されていくも
のだからでしょう。もちろん日本の現状
では、この可能性の開花が、社会全体の
趨勢と並行して、学問の世界にも見られ
る中央指向によって阻害されてしまう
という面もあるのですが、そうだとすれ
ばそのことは日本の知的状況にとつて大
きなマイナスではないでしょうか。人文
学部としては充実した内容を持つ本学は、
このことを追求する格好の場であるよ
うに思います。

学生も基本的にのんびりしているよう
で、私の属する哲学・倫理学講座など
は、居心地の良いせいも、なかなか卒業
しながらない傾向が見られるほどです。
これも、三月迄は黒板に向かう側にて、
まだ学生の立場に戻るのが容易に感じら
れる私にとってはうれしいことで、授業
以外の面でもいろいろ毎日のようにつき
あってもらっています。

生年月日：一九六二年六月十五日
出生地：ミュンヘン（旧西ドイツ）
好きなもの：ひとと話すこと／お酒／
古代ギリシャ哲学・中世哲学を手が
かりとし、人間の善き生のあり方を
めぐって哲学的に考察すること／写
真撮影／テニス／クラシック・ジャ
ズ・ロック・ポップス・フォークか
ら歌謡曲まで／ドライブ／榎野川の
川畔（倫理学・講師）

山口大学に赴任して

小原豊志

この四月に着任して半年が過ぎました。
着任当初は何かと慌ただしく、慣れない
ことも多かったのですが、ようやく最近
になって自分なりのペースがつかめてき
たように思います。

さて、大学院生から教官という立場に
なると色々な点で意識が変わるもので
その際自分の恩師の言葉が改めて思い起
こされます。ここではそのひとつを紹介
したいと思います。

国史学

研究室便り

いま山大・山口は

現在の国史学研究室の構成は、二年生
十二人、三年生十人、四年生十五人、研
究生二人（内一人はアメリカ人）、それ
に教官二人の合計四十一人です。学部生
数では、やや女性優位の傾向が、近年統
いており、また、人文学部のなかでは、
世帯数の多いほうに属する講座です。近
年、中国山東大学教官、カナダトロント
大学修士生、アメリカ人大学卒業生など

の留学生を迎え、わが研究室も国際色が出てきました。また、聴講生に退職後のお二人(私の父親くらしいの年齢の方、各五年ずつ)が在籍されたこともあり、構成メンバーに異質な方々が居るのは、研究室にとっていいことだと思っています。大学院修士課程には、過去四人が在籍し、それぞれ学問好きになって、巣立ってくれたのではないかと思っています。

研究室の年間行事では、四月の新入生歓迎コンパ、およびソフトボール、七月の七夕祭出店、九月はじめの古文書合宿、一月の追い出しコンパ、春の古文書合宿などを行っており、卒業生も顔を出してくれています。

国史学講座の教官は、八木充教授(古代)と田中(近世)の二人です。八木教授は、人文学部長の重責を三期六年勤められました。八木先生の学問好きは、ますます盛んで、雄篇「長屋王家木簡」と皇親家令所」を『日本史研究』三三三号に発表されました。(昨年度史学会大会でも講演)。田中も、刺激を受けて、頑張っております。近現代のスタッフがいないので、近年集中講義には、近現代の一線の研究者に来ていただいております。昨年度と今年度は、大阪市立大学教授広川植秀先生に集中講義をお願いしております。幸い近年は、近現代史で卒業論文を書く学生が出てきており、研究会も持って頑張ってくれております。

学内の史学系教官と学生で構成する史学会は、継続して活動中です。例年十二月初旬に研究大会を持っており、卒業生の御来聴、御報告を待っております。国史学研究室の同窓諸兄もぜひ御来駕、御

報告下さいますよう、お願いいたします。このことに限らず、同窓諸兄(諸姉)の御来信、御訪問を歓迎いたします。(田中誠二助教授)



国史学研究室にて



独文の面々 徳地にて 1992. 11

ドイツ語学ドイツ文学

文理、そして人文の、独文の卒業生の皆様、お元気ですか。相変わらず、独文は、山口市吉田、通称平川に存在しています。人文学部になって十数年、人文学部の建物の、最上階の六階には、今も変わらず、大きな声のドイツ語が響いています。しかし、研究室のなかは随分変わりました。たようにも思えます。変わらないのは、

相変わらず同じところに座り続けている私ばかりのようです。

第一に、独文は今、総勢三十三名です。ひとりの、独文生などいるかないないかの少数の、存続が問題となった文理時代など嘘のようです。しかも変わったのは、人数ばかりではありません。強烈な男の匂いのする場所が、今や化粧の柔らかな匂いに取って変わられています。これがまた、授業となりますと、男子学生を探すが無理といった具合に、その濃度は増してきます。ちょうど文理時代に、数が少ない女子学生が小さくなっていくように見えたのと同じように、今は男子学生がそんなふうに見えます。この状態は、英文、仏文などと同居している六階全体にいえることで、ここはさながら華やかな女子大の感があります。六階行きの狭いエレベーターはまさしく動く化粧箱で、私など小心者は、途中で降りて、とぼとぼ歩いて上がることもあります。

講義の出席者もほとんどが女性、そしてとても良くできる、研究室をリードするのにもまた女性となれば、「同じところに座り続けて変わらない」こちらの講義の内容も、必然的に変わらざるを得ません。あの堅苦しい、女性を描くのが世界一上手なドイツ文学の講義で、私は最近しばしば女性ものを取り上げたり、オーストリア文学の話をするのが多くなりました。ベルリンの壁もなくなくなり、統一したドイツは国際社会でなにかと注目される機会が以前より増してきました。私たち教師も、様々なことにおいて変わらざるを得ない、というのが講義に出ての実感です。これも変わった点のひとつだ

ろうと思えます。

また変わった点と言えば、先生方も随分変わられました。文理創設以来、専門の授業に携われた先生方は十七名、そのうち、現在在職中の方で、私の承知している方を挙げますと、志山先生は中央大、渡辺有先生は関西大、有村、樋口両先生は九州大、中野、渡辺信両先生は九産大、工藤先生は三重大と、それぞれご活躍中であられます。現在、独文研究室の教師は学習院大出身の下寄正利先生と私、岡光です。

今年度、人文学部の卒業生も十回目を迎えますが、これまで文理二十九回と併せて、独文のこれまでの卒業生は一五四(文理一〇八、人文四六)名です。かつては公務員、教職などが多かった卒業生の職種も、現在は、あらゆる方面に及び、わずかに近年、情報関係への就職が多くなっています。これもボーダレスの国際化時代の趨勢でしょうか。

最後にひとつお願いがあります。最近女性の就職がことのほか厳しく、女性の多い独文研究室では就職に苦慮しております。四年生が就職のために、卒業生の皆様を頼って、皆様のところを訪ねていくことも多くなるかと思いますが、どうかその節には、お力をお貸し下さいませようお願いします。

近いうちに、鴻文会の総会もあると聞いております。その際には独文の同窓会ももてれば、と思っておりますが、またいつでも、山口にお越しの節には、どうか人文学部の六階まで足をお運び下さいますよう、お待ちしております。

(岡光一浩教授)

一九九一年度

人文学部卒業生・
大学院修了生進路状況

人文学部

人文学科

哲学・倫理学

(株)大阪有線放送社山口放送所、萩市役所

中国哲学

日立造船情報システム(株)、(株)井筒屋、クボタシステム開発、ジャスコ(株)、黒崎そごう、伊丹市福祉事業団、佐賀リコー

日本思想史学

(株)大分バス、(株)中国銀行、(株)森組、長崎市役所、駿台予備校(講師)名古屋大学聴講生、(株)ビデオリサーチ、オンワード樫山、山口大学大学院

美学・美術史

東リ(株)、(株)大神社、生活協同組合こうべ、山口県庁職員、ヘルモン美容室、総合警備保障(株)、川岸工業(株)、鉄建建設(株)、山口大学大学院、ロッテ商事、(株)小林コーセー

国史学

山口県立山口博物館、(株)アイネス、徳山市役所、日本エアブレーキ(株)、(株)ゼンリン、九州不動産鑑定(株)、山口県史研鑽室、西鉄旅行(株)、山口大学研究生

宮崎県教員(高校) 東洋史学

大日本印刷(株)、日東電工(株)、(株)高田工業所、宮崎県民生活協同組合、宇部情報システム(株)、(株)バナホーム山口、(株)朝日ラディック、NNTT(株)中国支社、(株)高島屋、昭和アルミニウム(株)、広島高速交通(株)

西洋史学

中央出版(株)、山口菱洋システム(株)、(株)Victoria、山口県庁、日立INSソフトウエア(株)、日清食品(株)、林薬品、(株)イズミ、北条高等学校(講師)9月卒業

考古学

(株)宮崎銀行、(株)西日本銀行、山口大学埋蔵文化財資料館(非常勤)、山口市役所

社会学

セントラル・コンピュータ・サービス(株)、北九州市役所、日本電気(株)、山口県庁(臨探)、(株)広島銀行、(株)メニコン、北九州市役所、(株)ダイエー、山口大学大学院、国際電気(株)

社会心理学

日立家電、山口大学大学院、富士電機(株)、ヤマハ(株)、山口大学大学院、(株)三愛、リクルート、中央出版(株)

社会人類学

(株)萬望、広島旭化成ホームズ、凸版印刷(株)、(株)井筒屋、(株)エヌ・ケー・エクス、富士通(株)、安田生命保険(株)、住友軽金属工業(株)、凸版印刷(株)西日本事業部、福岡県庁

語学文学科

国語学

福岡市消防局、福岡県立遠賀高等学校(講師)、(株)友人社、長崎県教員、柳井市立柳井西中学校(講師)、山口県庁(臨探)、日本電気オフィスシステム(株)

国文学

福岡県庁、(株)ユニードダイエー、九州大学大学院、(株)たち吉、山口大学大学院、(株)山口セキスイハイム、山口県立柳井高等学校、(株)日立情報システムズ、(株)光建、クボタハウス(株)、(株)リクルート・フロム・エー、川鉄システム開発(株)、大田鋼管(株)

中国語学・中国文学

(株)下関大丸、ヒロセ(株)、(株)エフビコ、福岡県教員(高校・臨探)、(株)MRT開発、ヒロセ(株)、関門港湾建設(株)、東北大学大学院、日本通運

英語学

(株)三陽商会、山口県立柳井工業高等学校、メガネの田中チェーン(株)、山口県教員(中学校)、日本DEC(株)、日本電気(株)、アイネス(株)、九州日本電気ソフトウエア(株)、中国テクシス(株)、長崎県教員(高校)、萬有製菓(株)、(株)大阪有線放送社、飯塚市役所、大蔵省門司税関、山口大学人文学部助手

英米文学

大分県教員(臨探)、福岡県教員(高校・臨探)、鐘紡(株)カネボウ化粧品本部中国事業部、富士通FIP(株)、富士通FIP(株)、山口県庁、(株)菱化システム、福岡教育大学院、(株)ノエビア

ドイツ語学・ドイツ文学

福岡セキスイハイム(株)、新日鉄情報通信システム(株)、日本食研(株)、長崎オランダ村グループハウスステンボス(株)、広島県立府中東高等学校

フランス語学・フランス文学

西鉄旅行(株)、(株)神戸ポートピアホテル、東京海上火災保険(株)山口支店、9月卒業、日通商事(株)

言語学

中国新聞社、全日空(株)客室本部客室事業部、(株)菱化システム、西銀コンピュータサービス(株)、(株)メニコン、安川情報システム(株)、(株)リョービ、リクルート(株)神戸支社、9月卒業

大学院人文学部研究科

人文科学専攻

山口大学人文学部(臨探) 言語文化専攻 九州大学大学院、(株)トーヨー九州支店、学校法人福岡女学院短期大学、(株)尚文出版

会費未納の方のみ振替用紙を同封致しております、なにとぞお納め下さいますようお願いいたします。 終身会費 五、〇〇〇円 郵便振替口座 下関〇一五九〇二 加入者名 鴻文会

平成三年度事業報告

平成3年5月24日 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会
 6月22日 第13回役員会
 12月24日 「鴻文会会報第11号」発行

平成三年度収支決算書

収入の部

科目	当初予算額	決算額	比較増減	摘要
繰越金	5,157,977 円	5,157,977 円	0 円	前年度より繰越金
会費収入	1,000,000	1,095,000	95,000	219人分、平成三年度入学者は192人
雑収入	200,000	254,138	54,138	証券、預金利子
合計	6,357,977	6,507,115	149,138	

支出の部

科目	当初予算額	決算額	比較増減	摘要
会議費	100,000 円	33,880 円	△ 66,120 円	役員会車代ほか
印刷費	200,000	157,590	△ 42,410	会報印刷費 (3,600部)
郵送費	250,000	178,228	△ 71,772	葉書購入、会報郵送料 通信連絡費
寄付金費	100,000	110,000	10,000	日中学術交流奨励会 理学部同窓会お祝い
謝金費	100,000	65,000	△ 35,000	会報発送宛名書きアルバイト (35,000) 幹事謝金 (20,000) 事務手伝い謝金 (10,000)
事務費	20,000	12,728	△ 7,272	フィルム代、現象・プリント代、 文具
予備費 次年度へ繰越	5,587,977	5,949,689		
合計	6,357,977	6,507,115	149,138	

平成4年6月27日 監査の結果過誤なく的確に経理されていることを確認します。

監事 竹内通弘 印
 芳西靖幸 印

公開講演

第五回公開講演

テーマ 「中国の詩と小説」
 とき 一九九二年七月四日(土)
 ところ 徳山市民館小ホール
 (徳山市民生涯学習センター)
 講師 「唐代の詩における風景と絵画」
 人文学部 浅見洋二講師
 演題 「棲息堂文庫の『百家公案』」
 人文学部 阿部泰記助教授

平成四年度

山口大学人文学部公開講座

テーマ 「高齢社会をいかに生きるか」
 ー 高齢化の比較社会学ー

期間 平成四年十月十七日～十一月
 二十一日の毎週土曜日(六回
 シリーズ)

ところ 人文学部第一講義室

講師及び講義概要

- ① 小川全夫教授 一回(十月十七日)及び二回(十月二十四日)
 「老後のしあわせ研究」
- ② カシマ カナコ 三回(十月三十一日)
 「アメリカ社会の高齢化と日系アメリカ人」
- ③ 佐々木衛助教授 四回(十一月七日)と日本から
 「『生きる時間』の比較文化論ー中国と日本からー」
- ④ 光岡征夫教授(教養部) 五回(十一月十四日)
 「沖家室島にみる老人問題」
- ⑤ 小谷典子教授 六回(十一月二十一日)
 「過疎と過密の高齢生活」

平成四年度事業計画(案)

1. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会(6月23日)
2. 第14回役員会
3. 「鴻文会会報第12号」発行
4. 山口大学国際交流基金の設立準備
5. 鴻南会との共同事業
6. 会員名簿の編集準備
7. その他

平成四年度予算(案)

収入の部

科目	4年度予算額	3年度予算額	比較増減	摘要
繰越金	5,949,689円	5,157,977円	791,712円	
会費収入	1,170,000	1,000,000	170,000	5,000円×234人分 平成四年度入学者221人
雑収入	250,000	200,000	50,000	証券、預金利子
合計	7,369,689	6,357,977	1,011,712	

支出の部

科目	4年度予算額	3年度予算額	比較増減	摘要
会議費	100,000円	100,000円	0円	役員会、その他
印刷費	200,000	200,000	0	会報印刷費(3,600部)
郵送費	350,000	250,000	100,000	葉書購入、会報郵送料 通信連絡費
寄付金費	100,000	100,000	0	日中学術交流奨励会
事務費	300,000	120,000	180,000	会報発送宛名書きアルバイト 幹事謝金 事務手伝い謝金 フィルム、現象・プリント代
積立金	5,610,000	0	5,610,000	証券、定額預金
予備費	709,689	5,587,977	△4,878,288	
合計	7,369,689	6,357,977	1,011,712	

	昭60	昭61	昭62	昭63	平元	平2	平3	平4	計
人文学科	0	3	7 (2)	19 (5)	128 (61)	104 (59)	107 (57)	113 (78)	481 (262)
語学文学科	1	1	1	9 (2)	95 (77)	98 (78)	84 (68)	108 (90)	397 (315)
研究科					1	7 (3)	3 (1)	11 (6)	22 (10)
科目等履修生							2(1)	1	3(1)
研究生						2(1)	4(2)	4	10(3)
計	1	4	8 (2)	28 (7)	224 (138)	201 (141)	200 (129)	237 (174)	913 (591)

一九九二年度
人文学部在籍学生数
(一九九二年十月一日現在)

各研究室同窓会紹介

哲学・倫理学

武宮先生の還暦祝賀会

今年二月、山口市内のホテルで武宮先生の還暦祝賀会を開きました。武宮先生の旧文学部赴任以来のOB諸氏、哲学・倫理学研究室の先生方、現役の学生の出席の他に、九大時代の後輩の先生方が博多から駆けつけられ、総勢50名を越す盛大な宴となりました。OB諸氏のなかには、東京や大阪等、遠方から泊まりがけで参加された方々も少なくありませんでした。

皆が待ち受けるところに武宮御夫妻が登場され、祝賀会が始まりました。乾杯の後、遠藤先生が武宮先生の人となりを紹介されましたが、これが30分を越える長大なものでした。武宮先生の若き日の、身体を壊すほどの猛勉強ぶり、ドイツ文学と哲学の間の選択の悩み、御兄弟の母親代わりの生活、そしていま校舎を歩かれる時に聞こえてくる、大地を一步一步踏みしめる確かな足音、これらのお話はとても感銘深いものでした。

その後は和やかな歓談となり、OBの方々はかわるがわる先生のところでお話をされていました。その間、exhibitionとして、現役学生の「恋の季節」合唱(振り付けに合わせて、壇上で、10程、一列に並んだ実物の2倍大・拡大コピーの先生の顔を左右に揺れ、会場は——さまざまの思いを込めて——やんやの喝采でした)、飛び入りの尺八演奏、先生の御寵愛を最も受けたであろう「哲倫の歌姫」

E女史の「庭の千草」などが披露されました。

閉会前に武宮先生が出席者各位にお礼の挨拶をなされ、祝賀会の計画を聞かされたの困惑、今後の自分の歩むべき道についての思い悩み、ギリシャ哲学に由来する美少年への愛(これは何の話であつたか?)などについて語られました。

ホテルでの一次会は立食でしたが、二次会はちゃんこ料理屋の座敷となりました。武宮先生が、右手に徳利、左手に杯、満面に笑みをたたえ、見事なfoot workでお酌にまわっておられたお姿が印象深く残っています。

(文責・平成3年卒業・三好克己+M)

西洋史学

一、山口房司先生退官記念パーティー
一九九二年三月八日
かめ福 64名

卒業生の松永和生君、藤田淳君、竹中健君を幹事として、卒業生41名(山口先生の教え子の約半数)、在学生20名の出席で、盛大に開催されました。教官の側からは古賀秀男先生(教養部)と尼川が出席しました。

なお、四月に、山口先生は天理大学国際文化学部教授に就任され、他方、人文学部西洋史には、東北大学・博士課程の小原(おぼら)豊志氏(アメリカ史)が助手として着任されました。

一九九二年十一月二十二日
いこい絵本店 36名
今年のOB会には、渡辺眞治先生がお越し下さいました。山口先生もはるばる大阪からおいでになりました。古賀先生

には毎年御出席いただいております。教官5名に、有馬正人氏、馬場昌之氏、井町頼信氏をはじめとするOB16名と、在学生15名が集まり、大いに、飲み、歓談しました。

社会学

去る五月二十三日(土)、山口市熊野町の防長苑において、第15回社会学同窓会が開かれました。この度は木下謙治先生の九州大学への御転任をお祝いする会といたしました。出席者は以下の通りです。

- 木下謙治先生 近沢敬一先生
小川全夫先生 小谷典子先生
テツデン カシマ先生

(以下敬称略)

- 竹田守恵 松崎公彦 滝本龍也 藤井英樹 時浦恭三 木村浩 松崎孝夫 芳西靖幸 宮藤隆夫 嵐健次 鎌谷章宏 佐々木衛 益田哲 徳野貞雄 桑

- 木宏道 森重祐二 渡部雅史 林田徳夫 阿字雄徹 黒石耕史 長松正起 白土正道 松村嘉久 倉重加代 金子一 高田綾子 渡辺啓太

国文学

一九九二年二月二日(日)
よしの家
二十名にあとひとりの盛会
次回は八月頃、山口市以外の地で開くことを考えています。

* 編集後記 *

会員の皆様お元気ですか。この一年もさまざまな出来事を包み込んだまま暮れようとしています。人文学部もまた大きな問題をかかえて新春を迎えようとしております。

ご承知のとおり、人文学部は、昭和五十三年に文学部文学科を改組拡充して成立したのですが、いままた時代の要請に応えるべく、従来の二十二の小講座を新しい視点から六つの大講座制に改編し、平成五年四月一日よりの実施を予定しています。これにより学生諸君も、今までの専門分野の履修に加えて、更により広い関連分野の修得が可能になります。会員の皆様にも今後ともお世話になることと思っております。よろしくお願ひ申し上げます。

なお会報編集にあたりましては多くの方々より多大の御協力をいただきました。紙上をかりて厚く御礼申し上げます。
(S・T・S・Y)

深亭(維新公園)



山東省より贈られる。平成4年5月11月竣工